タ マ シ ギ の 観 察 (I)

Observations of the Painted-Snipe.

小 林 平 一

Hirakazu Kobayashi

ま え が き

本種は全アフリカ・マダガスカル・小亜細亜・印度・マレー・フィリピン・支那に分布し、我国に於ては北海道・本州・四国・九州に産するが、これは熱帯鳥類が日北区まで分布蕃殖する稀例である。本種が形態的習性的に他の鳥類に比して正反対で、♀が♂に比して大形で且つ色彩が甚だ♂に比し鮮かであり蕃殖期に於て♂が抱卵し、♀が他の鳥類の♂の如く声高らかに鳴くと言う事実は周知の通りである。

さて本種について筆者が観察に興味を持ち始めたのは昭和 22 年 7 月からである。本種は常に草深い中に棲んでいる事と、タシギ以上に保護色をなしている事と、その保護色に自信がある故か人間が接近してもクイナのように飛び立たぬ事等で仲々観察は容易でなく、あの特異なコーッ、コーッと云う鳴声のみが筆者の幼少時代からの不気味な存在であつた。ところが筆者が昭和 22 年 7 月上旬、シベリアから引揚げて内地の暑さにうだつてしまい、窓の戸と云う戸を全部はずして西方に広がつた湿田から吹いてくる風にうたれて毎日を過している時、何気なく窓下を見ると軒先 4~5m の草間に暑さにあえぎつつ、口で息をしながら筆者の顔を見上げている一羽の鳥をみつけた。これが抱卵中のタマシギ♂であつたのである。翌年も翌々年も全く同じ所に巢を作る。卵を取られても写真を撮られても平気で殆ど同じ所に構築するのである。幸いにもこの湿田は筆者宅の田であつたが、その翌年から父が或る都合でこの地を全々手入せず、ただ草刈専用の地にしてしまった。そこで筆者は何んの不安もなく毎日観察する事が出来た。毎日軒下で、コーッ、コーッと云う声をいやになる程聞き、思いのままに親鳥を見る事が出来、目の前で抱卵している姿を双眼鏡も使わずに観察する事が出来ては、およそ本種を飼育してみようと云う気は起らない。放飼のタマシギである。蕃

殖期では一寸見たい時に窓を開いて一分間もその辺をみていたらタマシギが平気で採餌したり、ハジラミを取つたりしているのを 3~5m 以内にみつける事が出来る。しかし卵が孵化してしまうと♀はさほどでないが♂はヒナをつれて特に草深い中に入ってしまうので観察は仲々困難であつた。

この“タマシギの観察”は以上の様な環境で、昭和 22 年から昭和 25 年迄 4 年間に観察したものである。場所は兵庫県神崎郡船津村大沢である。完全な観察をなし遂げるには尙数年を要するのであるが一先ず此処に報告する事にする。この観察に当り多大の御援助を給つた蜂須賀博士、葛精一氏に深甚なる謝意を表する次第である。

兵庫縣下における分布

本種は北海道以南に分布する鳥であるが、関東以西南に多くみられ、兵庫県に於ては全般に分布し、その数も多く全般的にみて夏鳥であるが一部のものは瀬戸内海沿岸（淡路・神戸附近、土山加古川附近の海岸近く）に越冬する個体が少なからず居る。従来本種の鳴声が体不相応な事と姿あまり見られぬ鳥であるので県下では非常に少い鳥の様に思われていた様であるが、ヒクイナやバンよりも多く各地に於て蕃殖している。しかし県下に於て少し山寄りの地点に入ると、1 月 2 月の頃のみは見られず極少数を残して海岸地帯の暖地に移り、3 月から 12 月頃迄は殆ど県下全般に復歸する様である。

記 載

♂ 成鳥の色彩

頭頂から上頸は橄欖色で褐色細斑密布、目の周囲を後方に走る白黄色部有、頭中線は黄褐色、喉の部分は白色、頸部下方になるに従い黄褐色縦斑多くなる。体下面は白色、上胸部に細く淡い黒色横帯がある。背側には軟皮色縦帯があり、雨覆及び風切には卵形帯黄色斑がある。尾羽には 4 条の黄色帯がある。雨覆及び風切の部分は逆光線により暗緑色の光沢を發する。脚は淡緑色、嘴は橄欖色。

♀ 成鳥の色彩

頭頂・体上面は黒褐色、頭中線は黄褐色、目の周囲は純白色。下喉及び頸部は栗色、上胸に黒帯あり。肩羽の下に白色槍状羽あり、風切は♂に似るも雨覆には卵形斑なく、殆ど一様に暗緑色を呈し、細い横帯（黒褐色）を密布

する。嘴は帯緑色で基部以外は美しい肉色で先端は少し赤褐色、脚は淡緑色、体上面・雨覆の逆光緑による暗緑色は♂より一層強い。

以上の通りであるが、♀♂の特に色彩の違う点は、♀に於て喉から頸部の栗色なる事、目の周囲の純白なる事、上胸部の黒帯が甚だ大きい事、雨覆の卵形黄色斑なき事、喉の白色部小なる事、嘴の肉色部の美しく大きい事、肩羽の下の白色槍状羽の甚だ大きい事等である。夏冬羽の色彩の相違はない。

各部の測定

筆者の測定した兵庫県下のタマシギ♂♀の大きさは次表の通りで、♀は♂より少し大形である。なお何れも死後数時間内の測定であり、単位は mm である。

月	日	性	開 張	全 長	翼	尾 羽	嘴 峰	跗 蹠
4 月	18 日	♀	480	270	140	43	48	46
5 月	9 日	♀	480	265	133	44	46	44
5 月	13 日	♀	470	255	134	43	46	44
	"	♀	500	264	142	44	47.5	45
5 月	18 日	♀	480	275	138	45	49	46
5 月	20 日	♀	485	260	140	41	47.5	44
5 月	25 日	♀	465	255	133	41	47	41
5 月	27 日	♀	480	260	128	40	46	42
	"	♂	455	248	123	39	46	39
2 月	5 日	♂	—	—	125	37	40	38
5 月	27 日	♂	440	248	122	36	39	42.5

幼鳥の色彩

♂♀共に♂親鳥と殆ど同じで判別困難であるが、嘴色が黒褐色なる事、測定上少し小さい事、逆光線による雨覆の暗緑色が♂親鳥に比して幾分弱い事、上胸部の黒帯が♂親鳥に比して顯著でない事等によつてのみ區別出来る。然し野外に於ける判別は殆ど出来ない。

雛ウブ毛の色彩

全身淡い黄褐色のウブ毛が密布して、頭上及び体上面のウブ毛のみ黄褐色が濃い。そして嘴から目を通つて体の側面から肛門附近までの体の両側に各一本ずつと、嘴から頭頂・頸・体上面から上尾筒までに一本と計三本の

顯著なる黒線が縦走している。その中、背面を通っている黒線の中央（翼のつけ根附近から尾羽のつけ根迄の間）には、更に顯著なる赤褐色の美しい縦線がある。このウブ毛のヒナが葦間又は泥上に伏す時は、余程でないと発見出来ない。その上、手でつかまえるまで動かないのである。

習 性

棲 息 地

池畔・水田・周年水のある湿地等の草間及びその附近に常時住み、ヒクイナやヨシゴイ程深い草の繁みを好まぬ様である。しかし時として水辺から数百米も離れた岡の上の草間でみる事も稀でない。蕃殖の終つた秋冬期には2・3羽から5・6羽位の少群を池畔などでみる事があるが、蕃殖期には群をなさない。また秋や冬にはタシギや渡りの途中のオオジシギ等と混棲している事もある。

飛 び 方

飛び方は他のシギ類の如く高速で遠距離を一息に飛ぶ事はなく、緩慢で脚を後方にカイツブリの様にのばして飛び、20~50 mも飛べば地上に下りる。その翼動や動作はクイナ類の如くで、強い羽音もタシギの如き鳴声も発せず、地面低く直線的に飛ぶ。性質が稍隠潜性であるので大抵の場合足元か又は2~3 mの距離から飛立つ事が多く、時として30 cm位の所を2~3回歩き廻つても飛立たぬ事すらある。

秋冬期本種を銃獲する場合、♀は♂に比してその数が著しく少い様に思われる（神戸附近の鳥屋に集積せられる数でみても同じく少い）。ところが4月から10月迄、特に蕃殖最盛期の5月6月に於ては反対に♀のみがよく飛び立ち♂は殆んど飛び立つ事はない（外敵が近ずいた場合）。即ち本種は蕃殖期に於てはその性質が♂♀反対になつている事がみられるのである。

採 餌 動 作

最もよく採餌する時刻は早朝及び日暮の時刻で、この時は草のない広い地点へ出ている事が多く、他の時刻には草間をあまり離れて行ふ事はない。しかし雨天曇天の日は日中でも広い所へ出て活動している。採餌動作は丁度アヒルのする如く、泥の中を嘴でジャブジャブさせ歩きながら探し廻り、時々一ヶ所で泥の中へ深く嘴をさし込んでタシギのする様に泥中から食物をぬき取

る。又禾本科雑草の種子を直接むしり取つて食する事もある。嘴は全体にやわらかいので相当自由に使用する事が出来る。時々警戒する時はカワセミの様に頭と尾羽をヒョクリ……ヒョクリ上下に動かす。歩行は一般に早くなく外敵が近づくとき泥又は水の中で伏す。この場合体下面の白色部がみえなくなると♂♀共に実に保護色満点で、美しい♀でさえもその美しさが泥の中で附近の草と調和がとれてかえつて保護色となり、近々 2~3m の所でも発見出来なくなるのである。採餌する時には自己の腹部が水に接する様な深さの所でも活動し、この場合は全くアヒルの様に水中へ頭を入れてしまつて採餌している。

食 性

筆者が4月から5月に亘つて調査した食性は次表の通りである。

年 月 日	性	食 道	前 胃	砂 嚢
1950年 4月18日	♀	な し	な し	小豆大の小石4ヶ、小形巻貝片7,8ヶ、 モミ皮の断片にて満つ、小形水棲甲虫 の羽片少数
" 5月9日	♀	な し	な し	小豆大の石8、砂少量、モミガラ3ヶ、 小鳥羽毛1本、モミ皮の断片にて満つ
" 5月13日	♀	な し	な し	黒色小形種子2ヶ、砂多量、禾本科雑 草の種子の皮にて充満
" "	♀	タニシの 幼貝1個	禾本科雑 草の種子	砂及び禾本科雑草の種子（未だ青い） にて充満す
" 5月18日	♀	な し	な し	禾本科植物の種子断片にて充満、水棲 甲虫（小形）翅片3ヶ、砂多量
" 5月20日	♀	な し	な し	同 上
" 5月25日	♀	な し	な し	砂少量、禾本科雑草種子にて充満
" 5月27日	♀	な し	な し	黒色種子3ヶ、禾本科植物の種子少量 及其断片にて充満、水棲小甲虫の翅 片1ヶ
" "	♂	な し	な し	禾本科雑草の種子少量、他は其皮の断 片にて充満
" "	♂	な し	な し	禾本科雑草の種子断片及砂にて充満

上記の通り本種の食性は4月より5月に於ては殆ど90%が禾本科雑草種子のみで、極稀に小貝及び小形水棲昆虫を採っている。繁殖期に於て然りであるから秋冬期に於てもその殆どが植物質であろう。最初の2ケは前年度の秋に泥中におちた禾本科の種子のみ食べており、その他は全部新しい未だ地に落ちない種子であつた。此れは直接雑草から口でもぎ取つたものと思われるものである。

鳴 声

鳴声(♀)初認

♀が鳴声を発するのは(地鳴にあらず)繁殖期のみであるが、その鳴声の初認は

昭和23年度——3月30日 夕方

24年度——5月4日 夕方

25年度——3月29日 夜間

で、24年度は如何なる理由か甚だ遅れた。しかしこの初認は正確である。3月中旬に入ると毎年筆者は宅の者、附近の人々殆ど全部に注意をうながして、毎年十数人の者がこの鳴声初認聴取に功を争うのである。その上、筆者宅の繁殖地は唯々200m平方内のみの湿地である故、1000m以上も遠距離から充分聞き取れる本種の鳴声を聞きもらす事は先ずないと云える。この鳴声は繁殖の始まる4月から10月迄続くのであるが、鳴き初めの頃はあまり回数は多くない。本格的に鳴き出すのは4月下旬からで、昭和23年度に初めて昼間発声したのは4月20日であつた(これ迄は夕方のみ)。これから10月迄は昼夜の別なく鳴くが、やはり夜間の方が回数が多い。最も盛んに昼夜鳴くのは巣が完成した頃から抱卵後期の間で、面白い事は一度卵が何か事故でなくなると当分の間全く鳴かなくなるのが常であつた。

鳴く時刻

4年間の観察では、最も良く鳴くのは日没後2~3時間、次に日出前1時間程、次に昼間と深夜で産卵及び抱卵期は殆ど休みなく鳴き続ける。昭和23年度の鳴声観察は大体次の通り。

3月——30日初認(夕方)2~3回鳴くも高く強くない。

4月——毎日は鳴かないが、日没後時々鳴いた。20日昼間初めて鳴き声を発し、21日から昼間しきりに鳴く。特に夕方は高く強く休みなく鳴き出し

た。いよいよ発情期に入つた様である。

5月——昼夜常に甚しく鳴く。

6月——同じ、11 日朝鳴き始めの観察では4時より日出前迄鳴く。25 日2巢発見（1ケは抱卵後期、他の1ケは第1 卵のみ）、27 日2 巢共紛失して以来全く鳴かず。

7月——昼間は全く鳴かぬ。夜間時々鳴くが下旬に入つてから夕方及び夜間鳴く。2日の夜間観察では20 時頃より深夜1時迄鳴く。1時以後鳴き止み朝4時半より又少々鳴く。17 日久し振りに午後4 時より鳴き始む（前に巢のあつた所より100 m 西方）、その後月末迄昼間殆ど鳴かず。夜間時々鳴くのみ。

8月——夜間昼間殆ど鳴かず。6日午前1時より観察せるに3時20 分第1 声。約1時間程鳴くも回数少し。中旬迄3 日に1 回位いしか鳴かず。

9月——時々鳴声を聞くも少し。

10月——稀に数回鳴いたのみで全く鳴かぬと云つてよい位。

♀ の 鳴 声

♀ の地鳴きはシッシッ、ギシッ・ギシッと鳴くと（榎本氏）云はれるが、不幸にして筆者は此の声は聞いた事がない。繁殖期に発する声は特異なコーッ、コーッと云う大声で体不相応に大きく1 km を離れても充分聞き取れる。

タマシギの営巢（小林撮影）

この鳴声の前には、ウッオーッと云う低音を5~6回発して次に、コーッと云う高声に移る。この声の詳細については“野鳥”132号 p. 147 拙稿“タマシギの鳴声”の項を参照ありたい。尙この高声は50回以上続けて鳴く事も稀でなく、又飛びながらこの声を発する事もその後度々観察した。しかし飛行時にはウッオーッと云う低音は発しない。又時々採餌間と発情期には、グーとかゴーッととかクワーッと聞える声（あまり高くないが底力のある）を突然立ち止つて発する事もある。この声は又♂が近くにいて採餌している時突然上空に他鳥が飛来した時などにも発する。2♀が100m以上離れて同時に鳴く事があるが、あまりそれが近寄つた場合（他から不意に他の♀が飛来した様な場合）は一方の♀は非常に驚いた様に何時迄も泥上に伏して動かず且つ鳴き出さない。

繁殖期に入ると♀の頸部一体には特殊な粘膜状の皮下脂肪が1mm以上の厚みに構成されて（♂にては之を見ず）食道と気管は頸骨を中心に左右自由に動く事が出来る様ゆとりが出来、加うるに気管の長さは食道より遙に長くて食道の周りにたくれた様になつている。タシギについて頸骨長と気管長（喉から気管支迄）を測定したところ、頸骨長53mm、気管長50mmであつた。之をタマシギについてみると、

性	頸骨長	気管長
♂	55 mm	53 mm
♀	65 mm	105 mm

で、♀の気管長は♂の2倍近く長く、又頸骨長よりも遙に長いのである。此の様な構造であるから体不相応に大きく且つ響のある大声を発する事が出来るのであろう。又筆者は♀の鳴いているものを銃獲して直に頸部を開いてみたところ、不思議にも食道は全体に経1.5cmの太さになつて空気が充満していた。筆者は食道に空気を充満させて、丁度尺八の原理であの様な響のある大声を発するのではなからうかと思つたのである。

♂ の 鳴 声

殆ど声を発する事はない。しかし他鳥に襲撃を受けた場合（筆者はモズに長時間追い廻された例を観察した）、又は非常に突然身近に人間が現れた場合には（繁殖期には）、キッと一声鳴く、この声はキッとピツとの中間音でありカイツブリの如くするどくない。しかしこの声は余程でない限り発しないもので、筆者の観察したのは唯だの2回である。その他繁殖期♂がヒナを引率する時、デュッ……デュッ……と舌つずみの様な声を発する。これはヒナを呼ぶ合図の声らしく、今迄探餌していた地点から他の地点へ移動する時などこの声を発する。するとヒナは♂の腰にぶら下る様なあわただしさで♂について行くのである。その他威嚇の時（蛇、人間等）ジャー、ジャーッと聞える声を出す。♂は他に鳴声と思はれる声を発しない。

雛及び幼鳥の鳴声

孵化したウブ毛のヒナは、ピョピョとワハトリの声を細く美しくした様な声を発して鳴く。よく聞けば、ピョウ……ピョウ……と聞え、又少し大きいピューウ……ピューウとコチドリを少し小さくした様な声を発する。この声はウブ毛がとれて本毛が生え揃つてからでも発している。空腹になれば特に連続的に鳴いている。

水 浴 動 作

本種はあまり水浴は行わない。そのかわり、水を嘴につけて盛んに羽毛をなで揃える動作をよく行う。その様は先ず嘴を半分程水中に入れて探餌していた時の泥をよく洗いおとして、その水のしたたる嘴で体全般の羽毛をしごき上げる。何回も水に嘴を入れてこの動作をするのは、或いは沢山体中に寄生しているハジラミが若干でも除き得るのかも知れない。しかし全く水浴をしない事はなく、昭和 25 年 5 月 13 日 9 時に一回だけ観察した事がある。その動作は他鳥に比して甚だ幼稚な感がして愛きようがある。水の中で中腰となり翼と体をブルブル振わせる動作は他鳥に变りはないが、この時尾羽を盛んに上下に動かし（セグロセキレイの様に）、嘴をチョイ……チョイ……チョイとゆつくり右と左に交互に振つて肩の方に水をかける様な動作をする。しかしこれは実効はなく、殆ど肩に水はかからない。（to be continued）